

秋水  
泡語

卷  
の  
八

二  
〇  
〇  
四  
年

先人W・フオークナーの智慧ある言葉を書き写して、一人でつぶやきを書き記している者のひそやかな励ましでしょう。

「われわれを取り巻く世界は、常にそうであつたように、はなはだしい悪と、ぞつとするような悲惨さに満ちています。しかし、われわれが芸術作品をつくることによって、その悪を根絶させたり、あるいは悲惨さを緩和したりするような何事かをなしうると想像することは、世界における芸術家の重要性に関する致命的な思い違いであり、また不都合な過大評価であります。……芸術家がその時代の読者のためになしたいと望める限度は、……彼らをして、もう少しよく人生を楽しませるようにすることか、もう少し上手に人生に堪えさせるようにすることです。……われわれが死者と食事をとものにできるのは、偉大な芸術家の作品を通じてのみであることを、そしてまた、死者との交わりなくしては、完全な人間生活は不可能であるということを思い出そうではありませんか。」

「芸術家は行動人ではなくて作る人であり、ものの製作者である……。芸術の価値を信ずることは、芸術が、あるものを作りうるということを信ずることです。そのものが叙事詩であつても、二行のエピグラムであつても、とにかく世界じゅうの人の手に、永遠に残るようなものを作りうると信ずることです。成功の確率は、芸術家に不利ですが、彼は、それより小さいことを試みてはなりません。」

一つ二つがわたしを知っていた人の思い出のよすがともなれば……

一月一日

ワイキキで平安願ひ明ける年

On the Pacific Ocean

一月七日

黙々と為さざるをえぬ冬の日々

(打ち負かされないなら、それはよいことだと思え)

冬の月桂求めた日は遠く

一月八日

手を腰に初望月を仰ぎ見る

(月を仰ぐ種族にも腰の筋を痛めるといふことがある)

一月九日

不正為す大公ここに宵恵比須

(虚栄だけを求めれば人は不正に至る)

ファブリスの叔母の豪胆うらやむ日

一月十三日

寒中を猫のダンディ徘徊す

一月十七日

バビロンに軍を送つて憲法を葬つた国無法の国よ

(法を廃せず死文にする国に正義は行なわれない)

シヌメールの言葉滅んだ肥沃の地今辺境の族<sup>やか</sup>が支配

一月十八日

困憊し権力欲のかたまりとまみえ闘う義は我にあり

一月二十日

勁き腰痛め引きずる冬の道

不正の者たちに対抗するために勁くあるべき足腰。

一月二十一日

「雪中遊歩」

大寒が北の海から雪運ぶ

雪を踏む音さくさくと足はずむ

赤芽鵜赤芽に雪が積もる列

雪の下金柑雪の空を見る

心象を白紙に戻す雪景色

雪景色利休鼠に変わる暮れ

一月二十三日

凍る野に無角のサイはただ一人

一月二十五日

雪徐々に解けて身心動き出す

動き出す春待つ者に青き火が

一月二十八日

帰去来の辞を書き下ろす暇なく俗物の中立ちまじり居る

一月三十一日

「ひたむき」を好むと言った人偲ぶ飛行機雲が冬空を行く

二月二日

「文学者」と称す政治家のさばって文学または人間圧す

東に「小説家」と称する政治家がいれば、西に「学者」と呼ばれようとする虚名追求者が巢くう。いずれも、新奇を求めて人間を抑圧する。その言動は精神の不健全を物語っている。

二月三日

豆を撒く疲れて腹の痛む鬼

「鬼は外」

二月十四日

春一番翻弄される鷗鳥

春告げる雨に波間の一沙鷗

雷鳴に驚く椿頭とうべ振る

一年以上もかかって合間合間に読んでいた岩波文庫版『万葉集(上)』を読み終わった。二千三百余首。日本人の感情表現の基底がここに形作られた、と考えることができる。巻末第十巻の同じ題詠の羅列を見ても自然詠のほとんどのヴァリエーションがここにあり、それと結びつく情感の定型が出来上がった感がある。それ以後の歌人は、この厚い堆積の上で表現を探らなければ

二月十八日

人体の動き万化し春の舞

ふうわりと風鳥となる美の肢体

たおやかなグリーンのダンス人もまたかけがえの無い嘆美の舞を

風鳥とは極楽鳥の謂いなりとその美しい舞踏は語る

ばならなかったのだ。間歇的に高く吹き出た抜きん出た歌人たちにも、三十一文字の定型の枠はその限界を大きく超え出ることを許さなかったのだと思う。堀田善衛の言う定家の世界に比類のない洗練の極みはそこに生まれた。明治期以来の近代は感情生活の領域を広げ、短歌の対象に広がりを与えたが、それでもこの詩形は情景・感情・思想を詠いきるには枠がきつすぎる。一方で日本語の音韻の単調さはただ言葉を連ねるだけではすぐに限界に突き当たる。押韻の代わりにリズムで諧調を、すべての詩論が求めるあの諧調を生み出さなければならないのだ。

飾り羽根白い風鳥人生を悲哀と呼んだ人の曲舞う

照明が照らす舞台に幻視する悲哀持つ人明日耐えるため

妻子に誘われてバレーを見に行く。ポリシヨイ・バレー団、マドンナは、Nina Ananiasvili. 最初はヴィヴァルディの曲「グリーン」のモダンな構成。つづいて、アフリカ音楽で構成した「second before the ground」というタイトルの同じくモダン・バレー。物語性は希薄で、クラシック・バレーの動作を様々に変奏した静かなしかし力強さの秘められた舞踏であった。そもそもバレーを見る機会は少ないのだが、この種のバレーを見たのは初めてだったので大変感心した。「白鳥の湖ハイライト」も、物語は変更を加えられ現代的に構成されていた。幕開けと終幕は練習場風景という変調が取り入れられる。舞踏は見事なものだ。人間の身体は実にさまざまなことを為すことができる。その感動は、演じる者と見る者の精神性に働きかけて引き起こされる。

皮肉に「猫」の眼で見れば、奇妙な人間の肢体がかくも美しい舞踏をすることが出来る。美しい猫に、あるいは風鳥にさえけっしてひけをとらない。

人間はどのように事物を見ることが出来る。わたしの前の席の中年男性は身を乗り出してわたしの視界をさえぎるほどだし、その隣りの七十歳ぐらいのキャップをかぶった男は、感激しながら手を顔の前にまで挙げて熱烈に拍手を送る。二人はそれぞれ一人で来たようだ。それぞれ舞台に何を見ていたのであろいか。プルーストの小説に現れる幻視にふけている人物に近いのだろうか。しかし、会場の外で出会ったら普通の人に見えるだろう。後ろの方では、中年女性たちが讃嘆の言葉を発している。人はあこがれの対象を求め心を満たそうとする。そのとき精神を満たす喜びによって、今日、明日、うまくいけばもう少し長い期間を生きて行くことができる…。

二月十九日

樂觀を意志せよ春のとは口で

二月二十日

好春光浩然不覺午睡中

出兵の兵と家族のその顔に時代を映す閉塞の感

二月二十二日

早春の嵐毅然と歩む道

二月二十六日

梅の下防御のための角も無くただひたむきな孤庵に習え

二月二十九日

早春を詠う「乗り物」春の中

三月三日

赤いシャツ着た老犬が梅見する

三月四日

空華して地に着き消える春の雪

木蓮が空華に出会う得がたき日

三月七日

山鳥と顔見合わせる春の雪

三月十日

白と桃帽子の上の傘が立つショウウィンドウに転倒の意図

周到な意図で飾ったウィンドウ手段としてのシュルレアリスム

デパートの喫茶店でA・ブルトン『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』を読み終える。

三月十一日

「口中小歌」

小庭桜花開

鶯声祝春来

好事訪山亭

感興延老歳

三月十四日

菜の花が道で迎える杣の里

（細君と温泉へ一泊旅行）

三月十五日

山なみの霜さつと撫で朝陽射す

佛仰臥枕の脇の春の道

起雲山トンネルの先雲も無く春風に乗り峠を登る

寝仏を一巡りして春尋ね

三月十九日

大学が浮き足立って教員の知性を試す時代に対す

まっすぐに空へ辛夷のように立つ

かのように我が家の式部春の夢

三月二十日

幾久しく交誼を願ひ春御膳

春彼岸川面をさらい水清め

三月二十二日

時に会う桜に雪が降りかかる

(テレビの映像)

三月二十三日

世の中を激動と見る者ばかり鴨長明の覚悟を持たず

三月二十三日

咲き初める花に明星月の盃

手に取ればしなやかに舞え花の精

地の欲をしばし忘れて春の宵やがては強き精神を期す

(アウグステイヌス『告白』を読んでいる)

五十九になった夕べに写真見る晴れの衣装を試着した娘の

四月一日  
紅雨降る時の雫の中にいる

四月二日  
花冷えを花と身を寄せやりすごす

つつましくあること願ひ花仰ぐ

四月六日  
エンドウに言葉と水をかける人

翼持つ天使にあらぬコウモリが春宵称え舞い試みる

四月七日  
本日また多忙。じつとがまん。

花散らす雨はいのちをいとおしむ

芽を出だす櫟は雨へ手を伸ばす

流転する飛花・花筏海の果て

わたつみの旅客となつて花いかだ

仙境に向かう潮や春の闇

四月十一日

鳥となり神話の島の春の空

(観覧車)

四月十二日

夜鳥の声に書を置く桜散る

四月二十三日

乾く土に影を引き連れ春の雲

四月二十五日

跛を引くほど老いた式部の春の夢

灯を消して干した布団の春の中

四月二十六日

もえる春静めて大地ぬらす雨

四月二十八日

「帰南山小亭」

中天半月嘉春宵

蓮花草園幼兒笑

本日奮勵了小事

騎乗過里渡長橋

五月一日

梅の木にとりつく千の虫殺す

血族の法事の前の虫退治

五月十三日

突然の争論が身にふりかかり彼我を照射す身を顧みる

身の卑小苦く見とどけ胆汁で核心にある白玉磨く

五月十五日

走り梅雨轍の音に時を聴く

睡蓮の池に水輪の花が咲く百また百と世界が開く

睡蓮は不染世間の法の中

仕舞い茶を大山蓮華見て喫す

五月十八日

じゃがいもの花を静かに見る五柳

園遊会敬し春愁撫育する

白いもの頭に緑衣山法師

五月二十二日

草を刈る人に五月の光降る

五月二十三日

午睡から覚めて調声老いた鶏

照り映える椎の葉おおう鎮守杜

たまねぎをその場に干した野末畑

野道行く遊子に発句縞の蛇

野の花を手折り見晴らす海と空

若竹と背比べする市のタワー

あざみ咲く鹿野へ発句求め行く

蛸袋ホタルに余る花室成す

五月二十五日  
茄子胡瓜トマトの苗と遊ぶ人

五月二十八日  
遊歩道毛虫がもがき春が行く

蝶になることも夢見に終わる蝶

前線が南の海に待機して人を促す雨安居に入れ

五月二十九日

カゲロウの命を救い命延ぶ

五月三十日

ホトトギス帰去来兮と鳴く寓居

五月三十一日

カレンダーの付録のような一日がたしかに今日と呼べる日となる

六月一日

今日は晴れたので蛍を見に行く。町内の有志が公園の池に蛍の幼虫を放っているそうだ。段段に水の落ちて行く池の連なりになっていて、池の上を行く板の橋がかけてある。南側には木が植えられて、今では林になった。月齢十三の月がぼぼ中天にあつて照らす中、枝を延べた木々の暗がりには蛍の火が明滅しておもしろい。順調に数が増えれば、名所になるだろう。

月光の木の下影で呼ぶ蛍

紫陽花に蛍、月をも愛でる夜

螢火に誘われて行く池の辺の月光そそぐ橋の舞台を

無面にて螢に見入る老いたシテ

シテの息ホタルに合わせ明滅す

舞台にはやがてホタルもシテも消え

六月二日

広大な夕焼けの空層雲が人事を無視し超然と在る

六月五日

もてなしに野イチゴ見せる卓の上

六月七日

水蒸気降って山海霞やまうみむ朝

紫陽花と霞みに雨の音を聴く

陳舜臣によれば、日本原産のあじさいに紫陽花と名づけたのは白居易。

六月十日

夏の首都半旗の下の老婦人

(元大統領夫人)

彼の主義には反対であつた。今の米国大統領にも。

田植え機が一人で植える世に生きる

間食もせずに四枚田植え終わる

汗せずに雨安居の飯食う愚禿

郊外に孤犀の歩む水田は日ごとに減つて迷いは去らず

『本綿以前の事』によれば、農繁期のような忙しい時には日に五度も食べることがあつた。

六月十四日

蝶一人ひらひら帰る山の庵

小竹の子食つて霍乱鬼の身は

腹痛み苦海に迷う夏の夜

六月十七日

トラックで移動苗代行く夕べ

六月二十日

宿の裏磯の船虫さつと散る

伊能道朝の水打つ宿の主

夏の朝船の隣りの寺と宿

山頭火の句碑が聞く声ホトトギス

海守る神の湊に宿りしていずこを目指し船乗りするか

「神湊紀行」

魚屋旅館の玄関前には、伊能忠敬宿泊所と書いた石柱がある。朝、そ

の三階のトイレットから金属の板で葺いた寺の屋根らしいものが見えた。道を挟んで斜め向かいに交通標識が出ていて、「吞海山、隣船禪寺」とある。狭い参道からすぐ境内に入ると案内板があった。種田山頭火は、この寺の住職と交友があり、ときどき宿泊したものらしい。山頭火が直筆の句をしたため、古い墓石を利用して碑になっている。これが山頭火生前の句碑としては唯一のものだそうだ。両者の話の中で使われなくなった墓石を使うということが出たものだろうか。石は書の大きさに比べて大きい。山頭火の書は端正なものだ。寺で詠んだものだから仏教の言葉が用いられ、句は定型。

松みなが枝垂れて南無観世音

そのそばに、住職の漢詩も石碑に刻んである。

其中一人守清貧

無辺風光藏家珍

随縁安住山頭火

飄乎深竹終入真

忙中しほし閑を得た。

六月二十五日

「海蝶夢話」

昔、雲水があつた

山深く分け入つて村々をたずね  
海風の吹きつける浦々をたどり  
ただひたすら修行に励んだ

とうとうあるときあの老師に出会つた

雲水はその叢林にとどまつて

老師と問答を重ね座禅に励んだ

終に師が「汝得吾皮肉骨髓」と言つた

僧は老師の法嗣と目され

叢林にとけこむほど修行に励んで明け暮れ

老師の寂滅に立ち会つた

しかし、因縁生起して寺を去つた

彼はふたたび雲水となつて

山野海浜を修行し巡ること久しく

一夜、神の湊と呼ばれるところで  
無住の荒れ寺に泊まった

明けると浦の長老が二人やってきて  
飯と茶を供して頼みごとをした

「わたしらにお願いがございます、  
ここの住持となっていたきとうございます」

雲水は飯を黙々と食べ

ゆつくりと茶をすすって

なおしばらく返事をしなかった

その場に蟬の声だけがあつた

「よろしい、ここにとどまりましょう」

僧はやつと沈黙をやぶり

「寺号を、吞海山・隣船禅寺といたしましょう」  
椀に残っていた白湯を飲み干しながら言った。

六月二十七日

凝固してガレの海馬は瑠璃となる

(日曜美術館)

雨の露床に一滴半夏生

夏点前電気の釜で沸かした湯

六月三十日

眼前に衰退を見て気もつかずただ形骸の国政選挙

わたくしもその一員のこの社会押しとどめ得ず坂道下る

七月二日

流雲に歩み淡々夏の月

七月九日

落日に無窮花を踏んで道半ば

七月十日

首伸ばし鷺が見つめる雨後の山

草刈った畦に白蝶雨上がる

半天を着た子の祭り羨望す

七月十一日

選挙戦予測どおりの結果出すこのなりゆきが皆からめとる

七月十六日

夕風に蝉の三声謎の歌

七月二十一日

蝉の声満ちて呼吸を緩くする

蝉よりも太くラブレー放談す

七月二十三日

小さな町に人がくり出し

近郷皆の祝祭日

せいっぱいに心遊ばす

シュルシュル パーン

空に花咲き

ゆらゆら しーん

海に花散る

七月二十四日

甲高い鳶の声聞く浜の夏

百合の花はらりと池に身を散らす

七月二十八日

持久戦猛暑とがまんくらべする

八月四日

家持の掉尾の歌を読んだ夏幼いやモリわが窓守る

八月六日

夏の子の帽子とリュックいせいよく

八月十四日

散水に梢に逃げる青蛙

八月十八日

風追ってさわさわ走る青稲田

八月十九日

地に落ちて天仰ぐ蟬野分後

(蘇鉄の葉に乗せてやった)

八月二十一日

隣家から風鈴の音夏惜しむ

「定期点検」

客がセールスマンと話している  
その声ははずんでいる  
ちよつと高い買い物をするのだから

若い夫婦の客は

小さな子供を連れていて  
着ているものはファッショナブル

自動車会社の方こそ

高度資本主義生産、大量消費を導く最先端  
時代の先端に行くデザインだ

車の点検に来たわたしは

古い詩を読む時代遅れ

「改革」にはじきとばされるのだから

子供の頃まげを結っていた人物さえ  
わたしよりずっとモダンだった  
後の世代が先を行くのは当たりまえ

ヒトには新しいことがよいことだ  
何か新しいことをしなくては  
今日は紅茶に砂糖を入れてみた

「陽の下に新しきものなし」  
と、

昔の賢者が言っているから

八月二十五日

紫陽花に夏の残光乾く花

茜蜻蛉<sup>あかかげ</sup>射す夏の残光腹腔へ

八月二十八日

家族で見る夏の終わりの阿蘇の虹

蝸が夏の暮らしを終える阿蘇

南海に台風、阿蘇はおぼろ月

八月二十九日

火の山を青い炎が駆け上がる

八月三十一日

夕空に雲が一刷毛秋を画く

鎌背負う老夫の影を映す月

(月齢十五)

九月二日

古本の匂いの中にスピノザという善智識立ちあらわれる

九月七日

世はなべてブラックアウト野分行く

事物とは変化、スイッチ入れなおす

野分行き天地を歌う虫の声

幾万のいのちが果てた台風の後の静寂虫の声満つ

九月九日

スピノザとライブニッツの年譜見るまさに天賦の知性の軌跡

その知性も人間の社会で苦闘する。

九月十一日

乱れ萩風姿整え花となる

秋海棠助け起こして花とする浦の苦屋に身すぎする者

台風の後片付けに疲労して見る夕空に淡い虹立つ

いが栗に刺され古代の人となる

見たせば秋の海ありよい夕べ

栗食べて為す人の生海を見る

九月十二日

赤に白点じて揺れる萩と蝶

莊周が見る風の海揺れる萩

九月二十一日

人乗せず大観覧車彼岸まで

九月二十二日

百日を過ぎて身仕舞い百日紅

九月二十三日

「海を見に行く」

曼珠沙華見て車駆り海目指す

お彼岸に宮の社に会合し飲食をする善男善女

（桜井神社脇殿）

秋風を乗せて波寄す二見浦

天地の初めの島を遠く見る二見が浦に万代の波

（夫婦岩の間に小呂の島が見える）

伊奘諾が帰還果たした此岸には大観覧車くるくる回る

閑雅なる茶筌の音に蜘蛛は去る

白萩を散らす雨聞き味わう茶

秋雨に彼岸此岸も見えぬ暮れ

九月二十五日

めくるめくオデュッセウスの遍歴は個として生きる人それぞれに

九月二十六日

我が門に結婚祝う客が立つ千秋の一つ秋の休日

まぶた越し秋の陽射しが眼球にオレンジ色の天球創る

眼球に秋の蚊が飛ぶ風に臥す

(わたしだけの星座がある)

蟹の絵の器に盛って栗を食う

一匙をこの栗植えた母に遣る

(口を開かせるのに一苦労)

九月二十九日

虚栄追う者が職場をかき乱すわが九州を台風一過

九月三十日

立待ちに娘を祝う花の束

立待てば光が洗う身と心

明月を仰ぐ種族の聴くしじま

月明に干したススキを奉げけり

(先月阿蘇で取ったもの)

十月三日

NHKスペシャル「チベット、天空の湖」を視て

高原にへばりつく草・花を食む羊の群れに生かされる人

天空に生きる人在り人間の生の真相体現しつつ

十月四日

遠くある灯火凝視する眼窓に映って秋の夜更ける

十月五日

真夜中に目覚め意識は人という不可解を見て少したじろぐ

十月七日

床の無い舞台の上で舞う奥義見極め得ずにただ舞って在る  
稲を干す匂いにペダル軽くこぐ

十月八日

色深く紫式部円熟す

(実が落ち始めた)

十月十六日

秋晴れで明けて新婦を送り出す

花嫁の父を演じる日とはなる六十年がうかうか過ぎて

人生を舞台と呼んだ戯曲家の脚本も無くこの役演ず

さりながら人はその場で役割を演じるように習性を持つ

感激で胸いっぱいと言葉がつまる新郎は好し<sup>よ</sup>

花嫁を導く父のVIDEO見る拙く老いた者の姿を

十月十八日

秋寒や娘の嫁した朝の鐘

わが家が華燭の典を祝った日郊外の田の收穫終わる

十月二十日

夢を見る過去に似たこと生きなおすことの不可能希求する夢

事起きる前に花野の夢消える

十月二十四日

水に浮く椎を流して残余なし

十月二十六日

被災地も照らすか今日の十三夜

十月二十七日

朝寒に暖所を探す竈馬

十月二十八日

内祝い持つて訪う人不在犬が迎える秋の十五夜

十一月二日

諸事を見て桜紅葉の散る日和

若者と月の蛩と名をつけた居酒屋で飲み秋は深まる

十一月四日

地が揺れて未明に目覚め五感研ぐ

地に伏した蝶ぱつと立つ秋深し

鼻歌で大輪の菊撫でる人

十一月七日

菊日和水掬う犬の舌の音

(チエニーが老いた)

わたくしの春秋想起させる音

十一月八日

秋の陽に野山息づくリズム聴く

十一月十日

めくるめく可塑的世界一度だけ実現されて巡り会う今日

人の癒えを待つか時雨れて時移る

十一月十三日

権力を志向する者流行のアメリカ流に棹さして嬉々

若者が訓練されて討論で試験を受ける世は変わり行く

討論で医者目指す者選び出す仁者ではなく弁の立つ者

今の世に古人の徳は消えかかる仁に近しい剛毅木訥

——

診断し古いテレビをてきぱきと修理する人社会支える

十一月十四日

犬式部病んで末期の冬立ちぬ

十一月十六日

賢女であつたチェニーの式部秋と逝く

型どおり寝かせた犬を花で埋め野辺の送りをする紙の棺

柿二つ残し煙と化す式部

(骨壺に骨をひろって持ち帰る)

十一月十九日

理不尽にアミノ酪酸不足する

十一月二十日

海棠が小春に惑い笑み開く

荒磯はまだ晩秋の日本海

(好天小波)

十一月二十五日

「記憶がなければゼロだ」と、ほぼゼロの母親を持つ神経学者

リフレインむなしく響く空世界「色」<sup>しき</sup>紡ぎ出す海の怪物

十一月二十六日

それぞれのコート姿を運ぶバス

それぞれのうしろ姿に影絵見るその身心と環境世界

十一月二十八日 旅慣れず息つく宿を探す雁

十一月三十日 皿洗い士さむらいの月尽きる夜

一月を厠で思案する黄菊

(小さな花)

「おやすみ」と、地球の外へ、冬空へ、時さかのぼる挨拶送る  
眼を閉じて能楽を聴く木曽殿の縁者の霊が謡う想念

十二月四日 冬雨に銀杏は炎上げて立つ

よい乗り手をこの乗り物に！冬の日々

十二月五日 目覚めて在る嵐の冬は夜明け前

「新世界」聴くかたわらで老人が左手を振る無意味に慈悲を

十二月七日

三上に及ばず黙し茶碗拭く

(詩文には向かないが考え事によい時間)

十二月八日

ちっぽけな我欲に過ぎぬ「リーダーシップ」を掲げて踊る者がはびこる  
見えにくいファシズム覆う冬の町

十二月九日

星磨く歳の余りをいつくしむ

オリオンと対峙し息をととのえる

十二月十一日

行く年や孫は男児と妻の報

(まだ胎児だが)

ホームレスに暮れの教会狭き門

年の瀬のダウンタウンの上空に航跡一つ天翔ける者

酔い醒めて電飾の街物見する

十二月十五日

地球から清冽なものの放射して冷えこむ朝は身を引きしめる

十二月十六日

エンドウの花が冬至の準備する

十二月十八日

うずくまり生死観照冬の蠅

偶然の場に蠅が在る冬の日々

暖冬を禿頭の髪刈つて知る

身心を時節に合つす冬至の夜

十二月二十五日

行く年や条光風に運ばれる

行く年とプロペラの音遠ざかる背進しつつ聴き耳立てる

十二月三十一日 寒鰯が雪迂回して到来す

大つごもり客は娘の舅殿

寒風にオリオンの腕ひゅうと鳴る

二〇〇五年 正月  
徐山亭 謹製



『スッタニパータ』

他の識者の非難を受けるような下劣な行いを、決してしてはならない。

一切の生きとし生けるものは、

幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。

第一四五偈

いかなる生き物生類であつても、

怯えているものでも強剛なものでも、悉く、

長いものでも、大きなものでも、

中くらいのものでも、短いものでも、

微細なものでも、粗大なものでも、

第一四六偈

目に見えるものでも、見えないものでも、

遠くに住むものでも、近くに住むものでも、

すでに生まれたものでも、

これから生まれようと欲するものでも、

一切の生きとし生きるものは、幸せで在れ。

第一四七偈